
あなたのキスの練習台

さすらい物書き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたのキスの練習台

【Nコード】

N1920B

【作者名】

さすらい物書き

【あらすじ】

修学旅行の夜に、こんな綺麗な海の見える場所に呼び出されたりなんかしたら、例え相手がガキンチョの頃から知っている幼なじみの優一だとしても、胸が高鳴ってしまうのかもしれないじゃないか。……いや、優一だとしても、というのは実は正しくない。“優一だから”、ドキドキしてるんだ。

「班行動、どうしてた？」

わたしを呼び出した優一がそうたずねたので「うーん、買い物とか、船に乗ったりとか、塔にのぼったりとかしてたよ。別に、普通」と答えた。

「そっか。オレは“もしも月がなかったら”ってやつを見てきたよ。けっこう面白かったぜ。月がなかったら、地球の1日って8時間だったんだって」

「ふうん、そうなの？」

突然、何を話し出すんだ、こいつは。

「そうなってたら、季節もなかったらしいし、人類も生まれなかったんだって」

優一はそれだけ云うと、急にしばらく黙り込んだ。

秋の夜風がひんやりして、少し肌寒い。

今夜はまんまるの黄色い満月が空に浮かんでいた。

「……で、なに？　こんな夜中に呼び出したりして。あんまり長くなると、里美とか勘ぐるからさ」

わたしはわざと不機嫌そうにせかした。

……ホントは、認めたくないけどドキドキしてた。

修学旅行の夜に、こんな綺麗な海の見える場所に呼び出されたりなんかしたら、例えば相手がガキンチョの頃から知っている幼なじみの優一だとしても、胸が高鳴ってしまうのかもしれないじゃないか。

……いや、優一だとしても、というのは実は正しくない。“優一だから”、ドキドキしてるんだ。

「オレさ」

優一が、こともなげに云った。

「昼間、赤峰に告白された。付き合ってくれって」

……へ？

わたしは頭がまっ白になった。

だけど、必死で思考を整えて、返事をする。

「赤峰さんって2組の？ え？ それで、なんて答えたの？」

「けっこうさ、好みかなって思って。もう中3にもなるんだし、彼女作ってもいいかなと思ってOKした」

こいつ、いきなり爆弾発言をしやがった……！

「へえ、そうなの」

「一応月子には報告しとこうかなと思ってさ。一番長い付き合いだし」

「べつに気にしなくていいのに、こんなただの腐れ縁」

「まあな。だけど、呼び出したのは報告するただけじゃないんだ」
まあなってなんだよと腹の中では怒りつつ、わたしは続きをうながした。「他になんの用？」

「こないだゲームで賭けやったろ？ オレが勝ったからそのときの約束を果たしてもらおうと思ってさ」

胸の鼓動が激しくなってきた。

こいつ、何を云い出すんだ？！

昔からそうだ。勝手気ままで節操がなくて、自信過剰で無神経。優一はいつも前にワックスとかで整えた髪型をいじりながらわたしの近くに歩いてきた。

「え？ 賭け？ 約束？ なんだったっけ？」

以前交わした“約束”の内容、もちろん忘れてなどいなかった。

“優一に彼女ができれば、キスの練習台になること”

バカな冗談を云い出したとあのときは思っていたけど、まさか、本気？！

考える間もなく、優一はわたしの目の前に立ち、わたしの肩をつかまえていた。

1年前までわたしの方が背、高かったのに、いつのまにか抜かされていた身長。

「と、いうわけで、彼女とキスするとき恥かかないように、練習付き合ってください」

「ばっ……」

バカ、と云って突き飛ばそうとした。だけど、混乱しているうちに、わたしの唇は優一の唇とふれ合っていた。

「ちよっ……な……、な、なにすんのよーっ!!」

わたしは顔を真っ赤にして、涙目になりながら絶叫した。

わたしのファーストキス……！

こんな理由で、練習台なんて理由で奪われちゃった……!!

「ばかぁーっ！」

わたしはもう一度叫んだ。

優一は、あわてた顔でこういった。

「ばか、そんな大きな声出すなよ！ 落ちつけ！」

幼なじみを隣のクラスの女の子にとられ、ファーストキスも奪われてしまった。

頭が呆然としている。

「月子、ごめん、オレ、ひとつ嘘ついた！ 謝る！」

「……は？ ……うそ？」

「赤峰に告白されたのは本当だ。でも、OKしたってのは嘘だ。断ったよ、オレには好きなコがいるからって」

「……へ？」

誰よそれ！ 突然の怒りの感情に、思考がついていない。

「……お前だよ。月子。オレが好きなのは」

「……………へ？」

「満月が綺麗な夜に、お前とキスしたいって決めてたんだ。オレにとって、月子との出会いは地球に隕石ぶつかって月ができたのとおんなじくらい重大な出来事だったって思ってたからな。それで、キスしたくて、嘘ついた」

今のわたしの顔は、どんな顔になっているんだろう？

恥ずかしくて見れやしない。めっちゃくちゃ変な顔になっているに違いない。

でもそんな顔のわたしに、優一は再び自分の顔を近づけてくる。

「え……ええっ？」

「月子、好きだ」

「んんっ……」

今度はとびきり優しいキスだった。

身体が、ふわふわしてきた。

……もう、一体なんなのよ！

満月は、人を狂わせる。

涼しい夜風が、火照った身体には気持ちいい。

「……あんたって、ホントわけわかんない」

「オレがわけわかんないのは昔からよく知ってるだろ？」

「……まあね」

そう。満月がわたしを狂わせたのだ。

だけどこんな心地いい狂気になら、浸ってもいいかななどと思いはじめていた。

(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

この作品は「えんぴつを走らせて」<http://7hp.jp/?id=pencil>の第4回小説コンテストに出品した作品です。

お題は「月夜」でした。

いかがでしたでしょうか？

よろしければ、感想をお寄せください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1920b/>

あなたのキスの練習台

2010年10月11日13時09分発行